

会 議 録

会議の名称		平成 30 年度第 3 回つくば市総合教育会議			
開催日時		平成 30 年 7 月 26 日（木）13 時 30 分から 15 時 00 分まで			
開催場所		つくば市役所 5 階庁議室			
事務局（担当課）		総務部総務課			
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員			
	その他	《教育局》森田局長、大久保次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長			
	事務局	中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任、鈴木主任			
公開・非公開の別		公開	非公開	一部公開	傍聴者数 7 名
非公開の場合はその理由		-			
議題		(1) つくば市教育大綱の方針について			
会議録署名人				確定年月日	平成 年 月 日
会議次第	1	開会			
	2	市長挨拶			
	3	協議事項			
	4	(1) つくば市教育大綱の方針について			
	4	閉会			

< 審議内容 >

事務局：ただいまから、平成 30 年度第 3 回つくば市総合教育会議を開催します。

開会に当たり、五十嵐市長から御挨拶申し上げます。

市長：今日もありがとうございます。今日で 3 回目、前 2 回、最初に提示した 10 の問いのうち 8 つまでは議論をしましたが、先生についての部分が残っていますので、そのことについて現状等を共有しながらお話を伺えればと思います。併せて、今後の大きな方針を考える上で、先般、小中一貫教育のレポートがまとまりましたので、皆様方に直前にお渡ししたのでどこまで読み込めたかわかりませんが、そのことを伺えればと思います。今回も忌憚のない御意見を願います。どうぞよろしく願います。

事務局：本日の会議ですが、お手元に配布しております次第に従いまして午後 3 時までとなります。まず、協議事項に入る前に、市長からもありました、先日配布させていただきました小中一貫教育についての調査報告書について教育局から説明させていただきます。

教育総務課長：教育総務課の貝塚です。お手元に配布させていただきました報告書につきましては、2012 年度から実施されております、つくば市における小・中学校における 9 年間の一貫教育について、これまでの 5 年間の成果と問題点を検証してもらうために、つくば市教育評価懇談会として、門脇教育長が招集・委嘱した有識者 5 名によりまして、協議されました調査結果が記載されているものです。会議につきましては、昨年 11 月 27 日から本年 6 月 25 日まで 9 回開催されております。その他、報告書にもございますが、関係者へのヒアリング、アンケート調査、学校の視察、懇談会、議事録の閲覧なども行っていただいております。教育局としましては、教育委員会での議論などを経ながら教育行政を遂行、施策を展開していく上での参考とさせていただく予定です。

事務局：ありがとうございました。今回は議事事項が 1 件となっております。

限られたお時間ではありますが、よろしくお願いたします。それでは次第の3、協議事項に移ります。以降の議事進行につきましては五十嵐市長よろしくお願いたします。

市長：総合教育会議にかかる案件はあくまで教育大綱についてということなので、本当は小中一貫教育の成果と課題の報告については別だてでやろうかと思ったのですが、この議論の中で一応形式上ですが、できればと思います。これから教育大綱を考える上でも今回のものは非常に重要になるので。ただ、お渡ししが直前でしたが目は通せましたか。

(各委員から相槌、コメント等)

資料編と保護者の自由記述がありまして。これが本当にリアルな声がありました。おそらく読み込む時間はなかったと思いますので、議論は改めてしてもいいかなと思うのですが、これについても一回時間を使ってもやる必要があるくらいの内容かと思いますが、まず今の読み込む前の段階で、どのような認識をしたかを順次伺いたいと思います。実は私が全体を読んだ印象と保護者調査まで読んだ印象の読後感が変わったので、次回お話しするときに評価が変わっても構いませんので教えてください。鈴木さんから所感を。

鈴木委員：かなり斜め読みをして読み込んでいないところですが、私自身がこのヒアリングの対象になっていて、私がヒアリングの段階で思っていたことが、そのとおりに出てきていることもあります。というのは、私は、「4 - 3 - 2の区切り」についてどうなのか疑問を呈していますが、その辺りのこともデータとして実際出てきたなと思いました。あと、今これまでつくば市は施設一体型の小中一貫校を建設する方向でいしましたが、小中一体型にしたが故の問題点が浮き彫りになってきたなど、この調査を見て実感したところです。

市長：柳瀬委員はどうですか。

柳瀬委員：色々考えるところはありましたが、まず教育の本質的な議論と、形としての部分と、両方踏まえた上で考える必要がある。一つ目は、小中連携校

にするか一体型にするかがあるが、その形と、教育の本質的なところを分けて考える必要がある。最終的にはクラスが学習する単位で、どういうクラス編成をするか、クラス分け、クラスターを作るかが問題であって、学校という大きな枠、地域は大枠で考えればよく、現場で教員が自由な発想でしっかりした教育をするという前提で考えれば色々な解決方法がある。そうした時にかなり混乱した状態で現場に立っているとすると、早く意識的にも解消してあげる必要がある。教育に集中できる環境を作る必要がある。その障害になることがたくさんあるとすれば、それは教育委員会が解消、解決してあげる方向で動かないと、現場の先生方は自分で解決できないことがたくさんあると、そういうことも書かれていたかと思いました。もう一つは、プロセスにおいて市民の合意形成が中々なされなかった。情報はまず流れてくるが、決定しているかのごとく、途中で色んな議論の上で合意形成されなかった、進まなかったことが市民と行政の不幸な関係を作りかねないと思いました。もう一つ、つくば市の教育の独自性、つくばならではの教育というところで、つくばスタイル科と ICT 教育がかなりクローズアップされていますが、それについて深い議論ができていないのではないかと。つまり、皆バラバラなイメージでつくばスタイル科をとらえていて、非常に良くできたマニュアルというか教科書を使っているから良いのだという意見もありましたし、それは一つのモデルであって、もっと自由にできるはずという意見もあった。「つくばスタイル科とは一体何だ」という問いかけが常になされないといけないのだけど、一つモデルができてしまうと、そうすればいいのだと思考停止しているのではないかとという危惧がある。ICT 教育についても、ICT を使って色々な可能性が広がるのは分かるが、これも一つ形ができてしまうと、テレビ会議とかをやれば ICT 教育になっているのだと、創造性が担保されていかない。もっと、こんなやり方もあるのではないかとこの場を借りてつくばスタイル科の意見を述べさせていただきますと、先日立教大学でゲストティーチャーと

して話した際に、立教大学では「立教ラーニングスタイル」というものを前面に出している。そうすると「つくばスタイル科」は一つの教科であると、国語とか社会科と同じで一つの教科という捉え方ではなく「つくばラーニングスタイル」、つまり、つくばではこのような学び方を現場でするのですよという一言が抜けてしまっているのではないか。「つくばラーニングスタイル」と考えると、教育長が仰る社会力をそこにどうもっていくか、みんな創意工夫した方法論として教育を考えるのではないか。「スタイル科」という科目にしてしまうと、道徳という科目に皆さん違和感を持っているのと同じように、勘違いしている面があるのかと思います。とりあえずその3つを指摘しておきます。

市長：ありがとうございます。倉田先生はどうですか。

倉田委員：小中一貫教育に関しては、開設当時15年前から関わっている人間なので、根本的な考え方としては、今までの義務教育の在り方、例えば6 - 3制が今の時代に合っているかというところから始まったような気がします。これを見直すためにはどうしたらよいか。今までの教育の課題を改善するために違う方法はないか。そういうことで小中一貫教育の在り方が浮き彫りにされて、進めていこうではないかとなった経緯がある気がする。4 - 3 - 2制のありかたも議論は出たが、どういう区切りがよいか議論はしたが、教員の中だけの枠で、柳瀬委員の中でもありましたが、やはり情報開示、公開、もう少し地域の人、保護者等に知らせて、理解を得る必要があったのではないかと感じている。それが温度差として、アンケートの中にも出てきている気がする。十分に小中一貫教育を理解しているか、理解度の問題と、取組内容、理論、方法を知っていてアンケートに回答したかどうかの差が当然出てきているのではないかと。その差が埋まらない限りは共通レベルで話し合いはできないのではないかと。そういう意味で情報の開示、公開が不十分だったのではないかと。知らせて理解して同じ立場で話し合う機会を設けた方が、今やっている教育がもっと理解されたのではないかと、今まで現場でやってきた人間として感じています。つくば

スタイル科とか、次世代型スタイルで、つくばの独自性をとってやっていこうと、そういうこともどれだけ理解されていたか。その進め方が十分周知されていなかったのも、それに疑問、不信感を持ってしまった方もいたのではないかと考えています。そういう意味で地域も巻き込んで皆で考えることを今後さらに進めることで、つくばの今の教育の在り方が良い意味で推進されるのではないかと思います。

市長：ありがとうございます。小野村さんはどうですか。

小野村委員：柳瀬さんの意見と重複する部分があって、あらかじめ言ってもらったと思います。アンケートとか個人的な意見までは目を通していないが、最初に頭に浮かんだのは、「拙速」という言葉でした。

そもそも、中1ギャップをどうとらえているか。中1ギャップが問題だというが、何かをとらえて「問題」と言い出せば問題になるが、言い方を変えれば、「竹の節目」だと思う。「竹の節目」がなくずるずるいくと弱い竹になる。中1ギャップをどうとらえるか、なぜ問題かが十分議論されていない。つくば市だけでなく全国的に。

単に小学校から中学校に校舎が変わっただけではなくて、色々なデータを見ると、中学校に入ると英語でつまずく子が多くて、そういう一面も無視できない。そういうことなく6 - 3制がダメだから4 - 3 - 2制というのは拙速ではないか。資料を見ている、なぜ変えるのか、統合するのかがよく見えない。保護者の意見の中にも未だに統合の意義が分からないとか、私が教育委員になったばかりの時に開校延期の有無があったが、「あの時開校していたらと思うと怖い」という声があった。全般に拙速という印象。

もう一つ、イエナについて勉強してきた。イエナの中で校舎について、階段の下にソファがあって、狭い場所に潜り込んで、居心地の良い場所で本を読んでいる。ところが今回統合した学校は天井が高い。一般的には天井が高いことは良いと言われるが、誰もが天井が高いことが良いわけではなく、子どもは

狭いところに入ることが好き。イエナの校舎を見ると、子どもを中心にした校舎だと思った。統合型の学校を見ると見栄えを重視しているのではないか。

私は教師をやっていた頃から清掃活動を重視していたが、あの学校は窓ガラスを子どもが拭くことはできない。掃除をどうするか聞くと、「大丈夫です。業者が掃除します」と説明を受けていたが、そういう学校を作るべきか、子どもが学校を大事に思ってきれいにしようと思える校舎にするのか、もう少し考える余地があったのではないか。

この統合は子どものための統合だったか、それとも何か新しいことをしようと大人目線ではなかったか、という辺りからもう一度考えるべきだと思いました。

市長：ありがとうございました。では教育長。

教育長：できるだけ丁寧に、内容を 17 か所整理した。全部言うと他の人の読み方に影響してしまうので。小中一貫教育は今年で 7 年目になる。検討委員会には、これまでの小中一貫教育を第三者的にどう見てもらうかをお願いした。小中一貫教育をこれまでやってきた効果がどういう形で表れているか、あるいは、実際につくばで始まった小中一貫教育をどう評価するか、良い小中一貫教育をやろうと努力してきた先生方がどう考えているか、ということをきちんと仕分けながら内容を読むべきだと思う。教育の効果が子ども達のどういう側面に影響を与えて今日に至っているか、施設一体型の一貫教育といっても、評価の対象は春日学園だけ。その春日学園は 1,000 人から 2,000 人に大規模化した。大型化した学校に対する評価と小中一貫教育の評価が混在している。保護者の 197 名が自由記述について記述している。大まかに、私の印象で言えば小中一貫教育がよかった回答は 197 名の中で 10 名足らず。圧倒的多数はなぜこんなことをやるのかという疑問が多い。正確に数えたわけではないが 9 割方は疑問。小中一貫教育に対する疑問なのか、一体型の弊害に対する疑問なのかはきちんと仕分けしなければいけない。それから、結果について回答した内容を見

ながら、先ほど小野村さんも言ったが、一昨年、小中一貫の秀峰筑波義務教育学校を作って開校を平成 29 年度にするか、平成 30 年度にするか、大きくもめた時に、市長の提案だったが最終的にアンケートをとりましようとなつて、その結果を見た時に感じたこととかなり重なる。先生方の 9 割以上は平成 29 年度の 4 月にオープンすべきとしていたが、子ども達、保護者はそうではない、6 割から 7 割は急ぐ必要ないとの回答結果だった。このギャップはかなり大きいと思った。最終的には平成 29 年度の開校は無理で平成 30 年度に開校したが、その時のことを思い出しながら報告書を読んだ。小野村さんから「拙速」、柳瀬さんから「急ぎすぎたのではないか」との意見があったが、小中一貫教育についても同じように思う。誰の評価か、実際にあった効果がどう表れているか、先生方がどう考えているかの 3 つを整理しながら考えなければいけないと思っているが、どれを今後市の教育大綱を作っていく中で重視するかは、言うまでもなく実際に小中一貫教育を受けてきた子ども達にどういう効果があり、どういう形で子ども達の成長、人間形成に影響を与えたかを見るべき。報告書の第 2 部は、子どもたちに対する多様な形でのアンケートとなっているが、結論を言えば、連携型と一体型の比較でデータを整理しているが、圧倒的に良い効果が出ているのは連携型である。一体型では、私の記録では「英語のコンピタンス」の 1 か所のみ。後は、「自信度」「先生からのサポート」「友人関係」とかは連携型の方が良い結果だった。こういうこともものすごく重要なこととして深く読み込む必要がある。最後になるが、小中一貫教育と大規模校になってしまっていることの問題性をどう仕分けながら考えるかが重要なポイントだと思っている。これからのここでの議論でも一番大きな問題になる。これからも小中一貫教育をやるとして、校舎としても一体型を作り続けることが望ましいのか、むしろ小学校、中学校をきちんと分けた方がいいか、中 1 ギャップを無くすと言っていて、このことが小中一貫教育のメリットと言われているが、むしろ逆ではないか。小・中を分けて小学校から中学校に行くことにステップ

を置いた方が、人間形成に重要な意味を持っているということが、今回の報告書で改めて指摘されたことは、全国的にも小中一貫教育を考えていく時に重要なポイントになる。4 - 3 - 2 制よりも従来の6 - 3 制の方がずっと子どもの人間的な成長には好ましいと問題提起されているのが重要なポイントになっている。イエナプラン教育との比較もしながら読んだが、それはおいおい話します。

市長：ありがとうございます。それぞれの御発言に対して何か質問やお互い聞くことはあれば。

倉田委員：このアンケートの中で私が一番気になったのは、学校の大規模化。小中一貫教育の取り組み自体を正確に把握できたアンケートなのか、学校の大規模化が弊害として現れてきている部分があるのかどうかをきちんと分析しないと難しい部分がある。連携型でも学校ごとにとると学校の違い、ひょっとしたら学年での差も同じ学校ではあったりする。その時の一単位、一クラスの評価だけで見て、適切な評価になっているか、検討する必要がある。理想を言えばつくば市全体の児童・生徒のアンケートを取れば正確に現れると思う。違いはどこから発生しているか、評価をきちんと細かく分析する必要があると感じている。

市長：おっしゃるように、課題が色々出ているが、課題がどこに起因しているか、大規模化というのは明らかにネガティブな要素だが、それが小中一貫教育と切り分けられるのかは整理しなければいけない。

小野村委員：倉田委員の御指摘はもっともだと思う。一方で、竹の節目が無くなっているという意見もあったことは事実。大規模化は悪影響があった。手元に12月19日の定例教育委員会の議事録を持ってきた。その中で、鈴木さんの発言だが、（子どもが）小学校時代にアンケートを取ったという話があって、小学校5年か6年の時に、学校の在り方について、最初は「置き勉」がどうしていけないのか、クラスでアンケートを取ってレポートをまとめて管理職の先

生に提出した。

市長：お子さんの話ですか。春日学園のお子さんの話ですね。

小野村委員：その後で、学校行事や視察で休み時間がつぶされることにとっても不満があり、生徒会が設置している目安箱に意見を何枚も入れたが黙殺された。要するにネグレクト。教師のいじめととらえてよいと分析します。鈴木さんが家庭できちんとサポートしたから学校に行き続けられたが、本来つくばスタイル科で自分の意見を言える子を育てているが、それを言われているとおりやったら、一切返事が返ってこなくて非常に残念だったと。先ほどの高い天井にも通じるが、主人公は子どもなのか、学校施設なのかが非常に大きな課題であって、しっかり見直した上で、さらに中1ギャップは何か、子どもたちがなぜギャップを感じるのかを検討していかないと答えは見えてこない。

市長：他にありますか。倉田先生に聞いてもよいですか。ずっと義務教育の在り方から議論をされ、その課題をどう改善するかという中で出てきた話とのことですが、当時の義務教育の課題はどういうもので、議論されたのか。

倉田委員：小中の区分けが良いのか、義務教育を9年間のスパンで考え、連続性、系統性を重視すべきではないか。小学校と中学校で完全には切れないが、教育課程を実践する中で、同じものを小学校よりもレベルの低いところで中学校でも繰り返して、行事も含めてやっつけてしまっている。そういう面で課題があると。9年間でどう育てていくかを重要視すべきで、子どもが1年から9年まで自分で成長を見直せる、小中一貫、一体型が理想だろうが、子ども達が自分で見直せることが必要ではないか。中1ギャップもアンケートを取った結果、結局中学校に上がるときに非常に心配。先輩のいじめなど色々あり中学校に上がる時に不安があるということが出てきたのも事実。学校によっては、例えば小学校で4校、5校が一つになる場合と、1小で1中というのでも状況が違う。そういう面でも交流をきちんと設けて、自然と中学校に上げられるようにつながるシステムを作らないとまずいのではないか。中学校に上がるときに、

さらに頑張ろうという意識を持てるような連携の在り方が必要だろうと挙げていた記憶がある。

市長：ありがとうございます。整理すると、連続性、6年でやって中1でもやることがあることが一つと、よくある中1ギャップの話として、もう少し連携を深め子どもの不安を払拭しようというのが大きく二つでよろしいですか。その中で、春日を施設一体型にするという議論はどう出てきたか。先生が関わっていたか分からないが。

倉田委員：春日までは関わっていない。最初に関わったのは吾妻小と吾妻中の連携の在り方。近いから自由に交流できるだろうと。小学校から積極的に中学校に関わって、児童と生徒が交流できるという課程を作ろうと、行事、カリキュラム等を組み立てた記憶がある。それが最初の小中一貫につながる取組の始めではないか。

市長：いわゆる連携型ですね。

倉田委員：ただ、春日の場合、当時吾妻小で800人いて県南で一番大きい学校だった。教室が足りなく限界で、他の特別教室をつぶす状況になっていて、さらに春日に住宅地ができてから、パンクするだろうと。春日の時は、どうまとめ学校の作り方をどうするかなどを議論したのだと思う。

市長：ありがとうございます。誰か春日が一体型になった経緯を知っていますか。調べておきましょう。連携型については比較的ポジティブな意見が多い中で、結果を読むと春日の一体型から起因しているのか、大規模なことが起因しているか分からないが、その部分が課題として出ていると思う。今まで市民ネットの皆さんは議会でよく話をされていたようなことで、声としては出てきている。どういう議論が出ていたか、よし悪しではなく確認する必要ある。教育局で当時の春日が一体型になるまでの議事録など、分かる範囲で経緯をまとめてもらえますか。他にどうですか。

鈴木委員：そもそも論になるが、小中一貫教育を大々的に掲げる必要があるの

かと思っている。小中が一貫であることは当たり前で、その連携が取れていなかったことにこそ問題があると思う。教職員同士も小学校、中学校で文化が違うからか、その間で連携が取れていなかったのかもしれない。その不足を補って、小野村委員が言ったように、節目をどのように乗り越えさせていくかがまさに教育だと思うので、小中一貫ということで新たに何かに取り組むのではなく、今まで不足している部分を埋めるというとらえの方が、労力の面からもベストな方法だと思っている。

市長：倉田先生の存在は当時の経緯を伺えるので非常に貴重で、小中一貫でいくという議論と、アンケートでも中高一貫が良いという保護者が相当数いるが、当時の議論はどうでしたか。並木も中高、県の学校は中高一貫校を作っていく流れがありますが、鈴木さんのお話に対して率直にお願いします。

倉田委員：中高一貫は、義務教育でなく連携は難しかったから、そこまでの議論は出なかった。小中の連携として、小学校と中学校の温度差を無くす。どう接続していけば子どもたちが上手につながって教育を受けられるか。先生方が、小学校の立場での見かたと、中学校の立場での見かたが食い違ってはいけない。教員同士、小学校で培ったものを中学校でどう受け止めて、どう伸ばしていくかが、今までは足りなかった。そういう意味で先生方の交流を十分設けて、お互いの温度差を無くして、つくばの教育の基本を踏まえてどう振る舞うのが望ましいか、そこから始まった。そういう意味で先生方の交流、同じ地区なら地区で小中一緒に研修会を行い、子どもの特性を知って、それを踏まえてつなげていく。小学校ではどう取り組んだから、中学校ではどう受け止めて発展させるか、具体策をその中で話し合っただけで進めていく体制を整えることで無駄、マイナス面を無くす。そこから始まってきた。その場合に、竹園、吾妻は近いから幼・小・中で連携・交流していた。さらに踏み込んで交流していこうとした場合、都会型でないと交流の機会は難しい。離れていると、労力、移動時間などが。私も筑波東中で4校の小学校を集めて積極的に交流しようとして行っ

た。その時の時間はかなりとった。ただ、交流することで非常に大きな効果があったと思っている。4校が一つの学校に上がってくる場合、学校の人数も違うし不安を感じている子が非常にいた。それが埋まったことで、お互いを知っていて学校に上がってきたと。私の時に子ども達にアンケートを取ったが、そういうことが改善されて良いことだと。小中一貫の考え方は良いことだと評価を受けたと思っている。内容的な問題だと思うが、どう取り組み実践するかに尽きると思うので、さらに模索する必要ある。

市長：非常に貴重なデータだと思うので、教育局にそのアンケートはありますか。

倉田委員：たぶん残っているはず。

市長：見てみたいので、教育局で探してください。いつ頃取ったものか。

倉田委員：筑波東中で校長やった4年間。毎年データを取ったので学校にあると思う。

柳瀬委員：倉田先生のお話を聞いて、現場の先生が小中の連携とか一体型の取り組みについて苦労されていたと聞いて安心した。一方で、少し風色が変わってきたのは、文科省も義務教育学校を発表し、つくば市に限らず全国で過疎化している小中学校が、閉校するくらいなら小中を一緒にして地域の学校を存続させようという動きで義務教育学校の流れがあった。その時は北部地域も構造的には同じで、放っておいたら全部廃校になって、小さく合併するなら大きくまとめてしまえということだと思う。それは、学校を合理化、効率化していこう、つくば市では今後も学校作る必要があるから、小中で作ってしまった方が、二つ作るよりも地域で作るほうが、都市計画とか行政の流れも一方であって、現場の先生のギャップを無くそうというのと別のところで大規模一貫校の方向に進んだのではないか。教育的配慮を考えれば、2,000人の学校は想定できないし、そうしてはいけないはず。そこで歯止めがかからなかった、他の先生方や保護者などの意見がうまくいかず、軌道修正できなかったところは、別の

構図が見えてくると思う。

市長：そもそも、適正配置計画の中には秀峰筑波は入っていなかったが突然出てきた。それは選挙の流れもあったりしたが。一つ倉田先生に伺いたいのですが、温度差という言葉は何と何の温度差ですか。

倉田委員：例えば保護者と教員でアンケートを取る時に、内容を同じレベルで理解して、小中一貫教育の考え方や進め方などについて、良いか悪いかの方向性などを答えることは難しいのではないかと。そうできていないと思う。教育的な内容、中身を理解して答えられているのか。

市長：すみません、その手前の話で、小中一貫の議論が出始めたころに、温度差をなくすためには小中一貫にする必要があるという文脈でお話されているのですが、その部分での温度差は、当初何と何の温度差だったのかなと。

倉田委員：教育を進めていく中で、具体的な学校の取り組みをどういう風に進めるかを地域にどう伝えていくか、十分に理解されていない面があるのか、伝えられていない面があり、そこから発生しているのかなと。

市長：僕が倉田先生のお話を伺って感じたのは、現場の先生方が分かりませんが、先生と何かの温度差があって、その温度差があってはいけないから小中一貫教育を進める必要があるという議論が進んだのだと受け取ったが、温度差とは何か。

倉田委員：私が言ったのは小中一貫教育を進めていく時に、現場の先生方と保護者の両方が同時に理解して進めていく必要があったのではないかと。周りの地域の人、小中一貫教育の考え方を理解してもらおう意味でも、それが妥当なのかどうか意見をもらい進めていっても良かったのではないかと。教育現場の中だけで具体的に進めていった面が、理解度を含めて温度差としてアンケートの中で出てきたというのが個人的な思いです。

市長：教育局に色々お願いしてしまいますが、当初の小中一貫教育を進める中で教育委員会での議事録等をまとめて欲しい。その中で見えてくるものがある

と思う。残っているかどうか分からないが、我々は何が課題だったから小中一貫教育が始まったのかを、当初の議論を見ながら知りたい。倉田先生からは連続性と中1ギャップの話があったが、それが小中一貫によってどの様に改善できたのかどうかを読み込みたい。当初の話を見たいと思います。他にこの報告について何かありますか。どれも大事な話で、全てがつながってくるので、こういう議論をすることなしに内容の薄い教育大綱にしては意味が無いので。

問は先生方の二つのことですが、「先生方はなぜ忙しいのか」「先生方の自己肯定感はどうなのか」の二つ。この間、局長から先生方の自己肯定感の部分で、全体としてはやりがいを感じているが個別の部分では低いということのデータはありますか。

局長：データは無いが、記憶の中でお答えします。全体的に高い、低いところ、低いところは、「やりがいを持っているか」どうか。それと、「教師として良い仕事ができていると思うか」などの評価は低くなかった。低いところの個別のところは、「子どもの集団をよく統制できているか」「一人一人のニーズにあった教育できているか」「子どもの自主性を伸ばす教育をできているか」などの個別の質問については、外国の先生方に比べると低い結果だった。

市長：数字はないですかね。正確な数字は後で共有しましょう。そういう中で、関連して、先生方は非常に忙しい。状況をどう考えるか、先生方の自己肯定感の部分、忙しさについて、一緒でも個別でも率直に聞かせてください。一番学校現場に直近までいらっしゃったのは倉田先生ですが、なぜこんなに忙しく、子ども達が自主性持って学んでいるという評価は低いのか。

倉田委員：教員は子どもが好きでプライドもあって、ポジティブな考えで進んでいこうとする人は高い。良い意味で改善していこう、前向きに努力していこうという姿勢を持っている。逆に、課題は全体の中、組織の中でどの位置でどう努力して、どのような役割を持っているかを十分理解していないと低くなってしまうのではないかと。組織の在り方の部分も問われている。なぜ忙しいか、

事務処理が多いと思っている。個人で処理しなければいけない事務的な量がかなりある。調査物もそうかもしれないが、煩雑化していて整理つかない現状があるのかなど。簡潔にデータ処理できないと、あれもこれも余分な負担があり、子どもに接する時間が少なくなってしまい、事務処理に時間が割かれる方向になりがちであり、改善すべきだと現場にいて感じていました。

市長：ありがとうございます。先ほど柳瀬さんも教育に集中できる環境を整備しなければいけないと。それは現場の先生だけでは解決できるものではない。このアンケートを見ても、かなり事務的なものに追われてしまって先生が忙しいとか、保護者からも先生に同情する声がありましたが、今の部分について柳瀬さんはどうですか。

柳瀬委員：私は学校の現場を離れてしまっているが、短いサイクルで評価を求められてしまう。具体的な数字で評価を求められてしまう。進学、部活動など良い成績をとるなどに評価が集中すると、短期的に頑張らなければいけないとなる。教育はもっと大きなスパンなので簡単に評価されては困るところがある。自己肯定感を目の前に設定してしまうと、頑張りすぎたり違う方向に力が入ってしまったり、日大のアメフト部でありましたが、勝つことを至上目的にしてしまうと、教育的配慮、合理的配慮が欠けてしまう。そういうゆとりの無さがあるのかと思う。うちの福祉サービスの事業所について言うと、事務処理はものすごくたくさんある。だけど、できるだけ得意な人に回して、現場で一緒に作業したりすることに魅力的な人はそちらに時間を割いて、事務処理は少人数で効率的にやると。そういう風に連携しているが、みんなで分担して事務処理すると、不得意な人にはすごく負担になると思いました。

市長：当たり前ですが、事務処理が得意な先生、苦手な先生はいるので、どうまとめるか今後の課題ですね。小野村先生どうですか。

小野村委員：倉田先生も言ったとおり、教師という仕事は際限が無い仕事だと思う。私自身もテスト問題を作るにも、良い責任のあるテストを作ろうと思ひ、

何日も前からやり始めるが徹夜して朝まで作ってしまうなど16年間繰り返していた。

事務量を減らすことは必要だと思う。秀峰筑波で言うと、職員室が学校の端にあることに驚いた。それを言った時は、「今どきの先生は職員室に戻らないのだ」と声があったが、そういうものではないと思う。家庭内でも主婦の動線を考えないと家は売れない。そういう配慮も必要だし、事務量も調整するし、授業をする以外のメンバーを、外からの援軍を入れることも必要だと思う。

一方、教師自身も抱え込まないということも必要。責任感が強い分だけ自分でやる傾向があるので、時間を区切ることが必要。問題の根本は、忙しさを解消することではなく、教師がゆとりややりがいを持てるようにすること。途中で辞めてしまう先生が多いことは、概して自己肯定感が下がっているのだろう。そう考えると、忙しさを解消しようという発想から、自己肯定感を高めよう、やりがいを強く持てるようにしようということが必要。

前から考えているが、外部の援軍、予算の確保は言うまでもなく、つくばでできないかと思っていることが、「春休みを増やせないか」ということ。夏休みのお盆を閉庁日にするのも良いが、自分が教師をしていた時は春休みを大事にしていた。春休みの何日間かは学校に泊まり込んで学級編制にもものすごく時間をかけていた。職員同士で声を掛け合って、今は大変だがここでしっかり時間をかけて良い学級、より子どもが過ごしやすい学級にしよう。4月7日に子どもが来たら、まず誰と話をするか、まずこの子と話をするかなというように、一人一人の立場になってロールプレイをすることで、子どもの理解が深まることもある。最初のスタートで時間を増やして、学級編制や授業の準備に時間をかけることで、先生方がゆとりを持ってスタートできるようにすること。それが一つの方策として有効ではないかと考えている。

市長：ありがとうございます。鈴木さんどうですか。

鈴木委員：教育委員になる以前から、「先生方はどうしてこんなに忙しいので

すか」と質問していたが、「先生方は忙しい」と世の中が言えは言うほど、保護者は学校に行かなくなる、関わらなくなる。こんなことで電話をしたらモニターペアレントと思われるのではないかと。つまり、先生方と保護者との距離を大きくしてしまうという悪循環に陥ってしまっていると思う。まずはハード面である程度忙しさを緩和することが第一になればいけない。それでなくても教職員の数は足りていないので、市で事務職員をもう一人ずつつけてお任せするのはいかがか。先生方が忙しくて、間違っただけの文書を出して来たり、間違っただけの年間スケジュールが出てきたり等、間違いが多くなると問い合わせの電話が増えるだけでなく、先生を信用できなくなるという状況が生じる。今回、部活動も朝練をなくしたりしましたが、とにかくまずはハード面で忙しさを緩和することが大事だと思います。その上で、先生方は忙しくて研修に行く時間も無いという声を聞きますが、大学 4 年間で習ったことや、義務的な研修だけでは先生としての技量、人間力は高まるはずは無く、そこに起因する忙しさもあると思うので、研修の質や量を再考し、今日的課題に合った内容のもの、先生のキャリアに合った内容のものを、市としてしっかり用意することが重要だと思っています。

局長：働き方の何が忙しいか、文部科学省で平成 18 年の調査と平成 28 年の調査を比べて、1 日の業務量の変化を調べた速報値があります。それを見ると、小学校で一番増えたのは、授業時間が 27 分、学年学級に関する時間が 10 分、今話題になっている事務量については 6 分となっています。それに比べて中学校では、部活動が 1 時間 4 分の増、授業が 15 分の増、成績処理が 10 分ということです。その他、授業準備が 15 分、学年学級系が 11 分増えているということで、子どもに関わる時間が少なくなっているのではなくて、子どもに関わる時間が逆に増えていると。本当は子どもに関わることは良いことなのですが、業務として関わるが増えているということです。

市長：どう解釈すれば良いのですか。

局長：担当する授業時間が増えていることは間違えない。ですから授業の準備も当然増える。成績処理も増える。それから学年学級系ということに関しては、保護者にこういう文章を出そうとか、今度学年でこんなことをやるからこういう準備をしようとか、そういうことが増えていることであって、一般に言われている事務が増えているわけではない。事務が増えているように見えているのは、その他の忙しい中で事務処理もやらなければいけないから、できたらやりたくない、無いほうが良いという風に考えている教員が多いと思います。

市長：部活が 64 分増えているのですか。

局長：部活は土日の話です。

市長：今の話は全て土日の話ですか。

局長：いえ、土日に限って言ったのは部活動と中学校の成績処理の 10 分です。

市長：これは局長の所感でよいので、何を減らすと言われたら何を減らすか、あるいはどういう力を借りてどうするかとか。

局長：文部科学省の方がもう少しやるべきことを整理する必要が間違いなくある。もしやるのであれば、先ほどからあるとおり人を増やさないと根本的な解決にならない。今できることは、今の範囲であれば、カリキュラムをあれもやりましょう、これもやりましょうと、「これはやりましょう。」もあるし「やってください。」もあります。協働教育が必要です、ICT 教育が必要です、福祉教育が必要です、全ての何々教育をやって欲しい、やりましょうというのが、これは総合的に学校の義務教育の 9 年間の中でどうやっていくかをもう少し整理することは可能かと思います。

市長：文科省の、例えばプールが 10 時間とか、何が何時間というのがたくさんあると思うが、自治体の裁量はどこまでありますか。

局長：教育課程で定められた何々を何時間やりましょうというのは、裁量の範囲はなくて、これは教育の法律でしっかりやるべきことをやると決められている。

様式第1号

市長：例えばプールの時間を他で代替えているとか、それは超法規的措置か。

局長：中学校は選択制があり、3年間の中で何々を何時間やれば良いという形があるので、2年生でやろうとしていたものを2年生でやれなかったので、3年生の中身とチェンジして、3年生で水泳をやるというように代替している。

小野村委員：すみません、質問をいいですか。

市長：はい、どうぞ。

小野村委員：とても不思議に思っているのが、この間まで基礎学力の低下で夏休みを減らして授業しなさいと言っていて、急に今度は働き方改革をしなさいということ。（夏休みだが）今日も市内の学校では授業をしていますか。それは続けなければいけないのでしょうか。

市長：率直にいきましょう。

局長：難しいですね。私も県にいた時に学力の問題というのはかなりあって、茨城の子ども達は基礎的な計算力とかが弱いと、これは全ての学びにつながる事なので、それを補填する必要があると考えた時に、日常生活の中でこれ以上子ども達の時間を拘束するのは難しいと。であれば、余裕のある夏休みに子ども達を集めて補習学習をするというのは一つの手ではないかと。そういうアンケートを取ったところ、最初は反対もかなりあったわけですが、いざやってみると、子ども達にとって非常に目標意識が高まり、勉強がしっかりできる。先生達も、普段見られなかった子どもの個別の指導ができて、やはり能力に応じた指導ができて良い。保護者の方も、多くは夏休みに学習の機会を与えてもらってありがたいとのことであつたので継続しているのが現状です。

市長：

小学校では4年から6年まで登校日があって授業をやっているそうです。4年生、5年生は基本的に全員参加とのことで。子どもに何をやっているか聞いてみると、「算数を中心にやっている。」と。子どもと「先生は夏休みも休めなくて大変だね。」という話をしました。今までの積み上げも大事ですが、市

長でできる部分があれば、ゼロベースで根本的に考えないと、先生の忙しさは解消できないと思う。

教育長：サマースクールは講師を頼むでしょ。

局長：そちらでなくて、学びの広場の方です。

市長：教育長から先生の自己肯定感とか忙しさとか、思うところを少しお話しをお願いします。

教育長：先生の忙しさの最大の原因は、先生そのものが足りないこと。大体、一クラス 40 人と法律で決めていること自体が本当に情けない。これを、一気に一クラス 20 人とすれば、今の先生の倍になる。もちろん人件費は保証しなければいけないが、そういうことを大胆にやらなければいけない。これは 20 年前から言っているが、財務省は聞く耳を持たない。文科省はその気になっているが、最後は財務省に蹴飛ばされる。というのが一番の原因だと思います。あとは、文科省が教育再生実行会議とかいうところで思い付きで言っていることを、中教審が手先になって動きながら現場にどんどん流してくる。私ははっきりと、小学校で道徳教育はやる必要ない、英語教育もやる必要ないとずっと言ってきていますし、いじめが増えると、いじめを何とかしなさい、不登校が増えると不登校を何とかしなさいと、次から次へと最後は現場に垂れ流しますから。現場が全部丸抱えしてそれに対応しなければいけないから忙しくなる。おかしな話は、「あなた方は忙しいのだから、忙しくならないようにあなた方が工夫してやりなさい。」と言っていることに象徴されることが実際に起こっている。イエナプランの先生方のように、我々は何のために子どもの教育をするのかを明確にし、そこだけに限定したら、先生方はもっともっと生き生き、楽しくやれると思っています。イエナプランの DVD を 3 時間くらい丁寧に見ましたが、そこで色んな人が語っていることを丁寧に聞きました。その中身を言うと、何のことはない、私が「社会力を育てる」と言って実現しなければいけないと言っていることを、実際にイエナプラン教育でやっているというのが

結論でした。

市長：ありがとうございました。今日はここまでにしなればいけないが、本当は 8 月は休みという予定ですが 8 月やってもいいですか。9 月は小林りんさんという軽井沢の「インターナショナルスクールオブアジア」という今世界的にも注目されているスクールの理事長にここに来てもらうことになったので、そこで世界の本当のトップ校がどういうことをやっているかを、ディスカッション形式で聞きたいと思います。ただ、イエナプランの DVD を私も見ましたが、その内容をここで共有しなければいけないので、イエナプランの議論をやって 9 月を迎えたい。10 月は STEAM (スチーム) 教育の、STEAM とは理系教育 + アートで、これも非常に大きな話題だと思っています。

事務局：前回調整した時には、ニューヨークに行ってしまうということで、1 月になってしまうとのことです。

市長：10 月の内容は考えます。11 月に私と教育長、教育局長を含めてイエナプランを見てきます。本当は皆さんと行けたらいいのだけど 11 月も持ち帰って議論ができれば。そういう風に継続しながら、まだまだインプットとディスカッションの段階なので、少しアウトプットはまだ先でご容赦頂きたい。ただ、色々議事録を積み上げていく中で、キーワードが非常にたくさん出てきています。今日の柳瀬先生のラーニングスタイルという要素も、イエナとも関わるし。イエナが全てではないけど、もちろん他にも色々あるので小林りんさんに来てもらうので、そういうことも含めてやっていきたいと思います。すみませんが、8 月もお願いします。

教育長：22 日は定例の教育委員会を予定しています。そこは外して下さい。

市長：難しい調整ですが、8 月もどこかで 1 回やりたいと思いますのでお願いします。日程は早めに言います。ありがとうございます。

事務局：本日は長時間に渡りましてご協議頂きましてありがとうございました。

市長の方からありましたとおり、8 月以降の日程は調整してお知らせいたしま

様式第 1 号

す。これをもちまして平成 30 年度第 3 回総合教育会議を終了いたします。本
当にありがとうございます。

平成 30 年度第 3 回つくば市総合教育会議次第

日時：平成 30 年 7 月 26 日（木）13 時 30 分～

場所：5 階庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 協議事項

(1) つくば市教育大綱の方針について

4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課